

# 特集 第1回外国人市民による日本語スピーチコンテスト

## 最優秀賞

初めての日本の旅、  
大切にしていきたい

于 愛盛さん



皆さん、はじめまして。私は中国人の于 愛盛と申します。「ウ」は「宇宙」の「宇」の冠を省いた字で、「アイ」は「愛情」の「愛」、「セイ」は「盛り上げる」の「盛」です。どうぞよろしくお祈りします。日本人の友達と勉強していた時に「于さんはアイモリさんと呼んでもいいじゃない。愛が盛り上がるように。」と言いました。それから名前はアイモリにしました。

私は、昨年の4月中旬に仕事で中国の大連から日本へ研修に来ました。もうすぐ9ヶ月になります。日本に来る前に日本語が通じるか、生活に慣れるかなどとても不安でした。

日本に来てから、日本の文化体験として東京、鎌倉、富士山などを見に行きました。一番印象に残ったのは富士山です。富士山に行った時、ちょうど天候が良かったので、とてもいい眺めでした。さすが日本の象徴的なもので、すばらしいなあと思いました。

日本料理にもだいぶ慣れました。私は中国にいるうちは刺身と寿司などのような生の料理をあまり食べたことがなく、日本へ来てから、生の料理を食べ始めました。日本の刺身と寿司は噂どりにおいしいです。しかし、生卵は私が一目見て、食べられないような気がしたので、生卵は食べていません。その代わりに、一度半熟の卵を食べてみたことがあります。問題なく食べられたので、今度は本当の生卵にもチャレンジしてみたいです。白い熱々のご飯に生卵をかけて食べてみようと思います。

私はびっくり仰天したことがあります。それは靴の修理屋さんのことです。靴の底が破れて武蔵小杉の修理店へ行きました。3000円ぐらいで修理できるかと思っていたら、店頭で「片方だけで2千円、一足4千円。」本当に高いので驚きました。それでは新しい靴を買ったほうがましではないか。皆さんどう思いますか。今、4千円の靴を探しています。

私はコンピュータ関連の仕事をしています。普段仕事が忙しいので、日本語を勉強する時間があまりありません。このままだと、日本語が全然上達できないのではないかと感じています。そこで、武蔵小杉にある中原市民館に行って、ボランティアの人たちから日本語を勉強することにしました。ボランティアの人たちの熱心な姿に感心しました。そして、心から感謝しています。彼らに熱心に教えていただくことは、私の勉強の原動力になっています。今私のようにボランティアの人たちから日本語を習っている人たちは、きっと私と同じ気持ちでしょう。

日本へ来てから深く感じたのは、国家はそれぞれの国に区切られていますけれど、友情は国を超えたもので、国に区切られるべきではないということです。どの国の人であっても、みんな同じ人間です。お互いに他国の言葉と文化を勉強してお互いに理解したら、みんな友達になれます。皆さんもどんどん外国人とお互いに理解して友達になり、国を超えた友情を私達の手で築こうではありませんか。

初めての日本の旅ですが、その経験と思い出を大切にしていきたいです。あと2ヶ月で帰国になりますが、残りの時間をもっと大切にして日本の文化を勉強していこうと思います。

### 受賞後のコメント

「学生の時は、自信と勇気がなくスピーチコンテストには参加できませんでした。今回、このような機会に恵まれてチャレンジしてみました。」受賞はとても嬉しく、また熱心に指導して下さいました先生やボランティアの方々本当に感謝しております。ありがとうございました。

## 国際交流協会優秀賞

美しい日本語よ～、どこへ

李 振全さん



スピーチコンテストは、日々なので、緊張してセリフを忘れてしまいそうです。これは、「やばい～」。「やばい」という言葉は、すでに皆さんがよく使っ

# スピーチコンテスト

ていると思います。この言葉の意味は、「よくない、まずい、危険である」という意味ですね？しかし、こんな使い方を聞いた事はありませんか？夏休み前に出会った同級生の友達と一緒に、学生食堂で食事をしていた時、その友達は料理を口にして「やばい」と言いました。「えっ、やばい？何でやばいの？」と私は意味がわからなくて聞きました。すると、友達は、また「やばいおいしい」と言いました。「やばいおいしい」というのは、一体どういうことなのでしょう。多くの日本人の若者は、どうして先ほどのように、料理がおいしい時に、「やばい」を使い、気持ちが悪い時に、「きもい」と言うのでしょうか。また、どうして「でも」の代わりに「ちよー」という言葉を使うのか。皆さん知っていますか？

私は、なぜ多くの日本人の若者が、そんなにくずれた日本語を使うのか、アンケートなどで調べてみました。主に二つの原因が挙げられます。一つ目は、社会が進む中で、新しい言葉も生まれるし、昔の言葉の意味も変わってくる、というものです。例えば、「ぜんぜん」という言葉は、否定文ですが、使えないと教わってきているのに、「ぜんぜん大丈夫」という言葉に、違和感がないと思っている人は、少なくないでしょう。二つ目は、多くの若者は主に女子高生ですが、自分達が生活している中で、普通の日本語で話したらつまらないし、新しい言葉を使って自分の居場所を作りたいというものです。また周りの人の影響で、ただ何となく使っている人もいます。若者たちは自分達の話を、仲間や同世代の間だけのものにしたいようです。このような言葉は、知らないうちにどんどん広がりがつつあり、若者の間で、流行り始めたのだと考えられます。

私が日本語を勉強したかったのは、日本のドラマや、ニュースなどの影響を受けたためでした。毎日着物を着ている日本人女性。仕事好きで深夜まで、残業している男性。進学をめざす、頑張り屋さんの学生。日本人は勤勉で、美しい言葉を遣い、自国の文化をきちんと守っている国民でした。

しかし日本に来てから、私の日本人のイメージが変わりつつあります。着物ではなくセクシーな服を

着ている女性が多く、深夜、繁華街で遊んでいる学生をよく見かけます。また、多くの若者は、本来の意味としての言葉を使わず、新しい言葉やあまり意味がないように思える短縮語もよく使っています。例えば、「やばい」、「マジ」、もそうです。他には、「スピコン」、つまり、スピーチコンテストのこと、それから、「ミート」、これはミーティングのことだそうです。大学で使われている言葉で、「ばんきょう」は、「一般教養」のことです。「チャイ語」、これは、「中国語」。「フラ語」は、「フランス語」です。言葉は、生き物なので、変化するのは、当たり前かもしれません。しかし、普通の意味をなくさないよう、伝統的な文化や大切な言葉を守らなければいけません。

私が日本に来て、実際に目にしている多くの若者は、カッコいいと思える言葉に夢中になっています。それは、目先のものを追いかけている姿のように思えてなりません。はっきりいえば、自分の国の文化や言葉を大切にしていけない、短絡的な生活態度だとも言えます。私が憧れ目標にしている勤勉な国民、そして、美しい日本語を使い、礼儀正しい日本人の姿は、どこに行ってしまうのでしょうか？服装や髪型などにこだわるように、言葉の美しさを心掛けるのは、とても大切なことではないかと思えます。

これからの社会を背負うのは、我々若者なのだ、そして美しい日本語を守り伝えるのは、ここにいる私達若者の役割なのだと思えます。言葉の使い方を守る事は、文化を守ることに繋がります。自国の文化や歴史を学び、よさを知り、日本語を誇りに思えるように心掛けるべきではないでしょうか。

私は、日本に来てから、多くの人に生活面や勉強面などで、支えられてきて、この国が好きになりました。そして、この国の言葉も大好きです。これからも真剣に日本語を学んで行きたいです。皆さんも一緒に、正しく日本語を使いませんか？新しい言葉ばかりに熱中してしまうと日本語の将来は、「やばい」ですよ～。

## 川崎ライオンズクラブ優秀賞

一番あたたかい場所

スワンパリン ガンターさん



寒い日が続いています。皆さんにとって、一番あたたかい場所はどこですか。このあたたかい場所というのは、体だけでなく、心まであたたかくなるという意味です。悩んでいるとき、ただそこへ行けばどんな問題でも解決できる。

さびしいとき、そこへ行くだけで寂しさを忘れて、楽しくなる。失敗したとき、ただそこへ行けば、優しい腕が待っている。実は、私は日本に留学するまで、自分にとって一番あたたかいところがどこなのかわかりませんでした。でも、今はわかります。私の答えは「お母さん」です。

私は一人娘で、お母さんとは、いつも一緒。同じ年の友達みたいでした。今日、何があったとか、だれとどこへ行ったとか、ぜんぶお母さんに話しますから、私にとって、お母さんは日記みたいです。秘密なんかありません。子供のときから私の遊び場はお母さんの店のあるデパートの中でした。大学生になっても、デパートの周りでしか遊ばせませんでした。友達と約束する前には、いつもお母さんの許可を求めなければなりません。バンコク以外のほかの町へ旅行する計画があっても、友達は私を誘いません。はじめから無理だとわかっているからです。

友達と比べて、私はやりたいことができません。お母さんはいつも私を子供みたいに扱います。「私はもう子供じゃないんだから心配しなくてもいいのに人間は自分で経験しなかったら、いつ本当に大人になるんでしょう。」そう思ったら、お母さんが言うことを「うるさい!」と感じるようになりました。「もういいわよ! ほっといてよ!」と思わず怒鳴ってしまったこともあります。

だから大学を卒業して、日本に留学をしたいと言ったときは、大人として自分で自分のことを決めたい、という気持ちが強かったのかもしれない。お母さんはもちろん大反対しました。私は「これは私の将来だから、自分の道は自分で選びたい。今の私の日本語じゃ、いい仕事は見つからないよ。」と訴えました。お母さんは仕方なく許してくれました。でも、とてもさびしそうでした。

日本に来る前は、私は「もう大人だから、一人で暮らすなんて平気だ」と思いました。一人暮らしの大変さはありませんでしたが、自由になれたような気がしました。でも、それははじめのうちだけでした。お料理、お掃除、洗濯。それに、日本語の勉強、テスト、アルバイト。日本語の漢字も多くなって、クラスメートにもついていけなくなり、もうあきらめようかと思いはじめました。

そんな11月のある日、とうとう私は倒れてしまいました。休んだことのない学校も休んで、一人で部屋で寝ていると、知らず知らず涙が溢れました。その時、お母さんのことを思い出しました。本当はさびしかったのに、結局は私を日本に送り出してくれませんでした。どんなに忙しくても、疲れたと言ったことがなくて、私には家の仕事をさせませんでした。

タイにいるときは、それが当たり前だと思っていました。でも日本で生活して、自分がどんなにお母さんに甘えていたかしみじみ感じました。それで、私はやっぱり勉強もがんばりたい、と思いました。

今も、お母さんは1日に3回、タイから電話をかけてきます。でも、いまの私はそれをうるさいとは思いません。素直に、お母さんの愛情に感謝することができます。

自分のあたたかい場所は多分身近なところにあります。人間は一度寒くならなければ、そのあたたかさに気がつきません。寒いとき、いつも帰れる場所を大切にしてほしいと思います。皆さん、皆さんにとっていちばんあたたかい場所はどこですか。

## 講評

審査委員長 関口 明子先生  
(国際日本語普及協会常務理事)

今年は14人という大勢の方のスピーチを聞かせていただきました。皆さんの日本語の表現力、構文力などが粒ぞろいでしたので、審査をして順位を決めるのに困りました。皆さん誰もが、どの人もすばらしかったと思います。ですから、どの方が最優秀賞とすぐ決められず、難しい選択でした。このスピーチコンテストが多くの皆さんの中に普及して、それだけレベルが高くなっているという証明だと思えます。

最優秀賞は于 愛盛さん。滞在期間が短い中で、大変印象深いお話をしてくださいました。日本語の表現力、構文力、訴える力がすばらしかったです。自然の形で、あまり気負わないで、優しく話されていました。友情は国を越えて、みんな友達なんだという強い訴えがよかったです。

国際交流協会優秀賞の李 振全さん。「美しい日本語よ～、どこへ」ではたいへん勉強させていただきました。「チャイ語」、「パンキョウ」など初めて知りました。それらのことばを大きな紙に書かれ、大変見易くスピーチに効果的でした。また、お話にユーモアがあり、楽しく聞かせていただきました。その中で、洞察力の鋭さもうかがえました。

川崎ライオンズクラブ優秀賞のスワンパリン ガンターさん。はっきりとしたとても聞きやすい、きれいな日本語で話されました。話し方も落ち着いていました。身近にいるお母さんのありがたさが、心に強く、温かく伝わってきました。日本でがんばっているスワンパリン ガンターさんに拍手を贈りたいと思います。